

こども世界
名作童話
6

う しょう じょ
マッチ売りの少女

作・アンデルセン 文・木村由利子





こども世界名作童話 6

マッチ売りの少女

一九八七年十一月 第1刷

作 ✧ アンデルセン

文 ✧ 木村由利子

絵 ✧ 若林三江子

発行者 ✧ 田中治夫

編集 ✧ 村地春子

発行所 ✧ 株式会社 ポプラ社

東京都新宿区須賀町五 丁一六〇

振替東京四一四九二七一

TEL 〇三—三五七—二二六(編集)

〇三—九七八—〇〇五一(営業)

印刷 ✧ 瞬報社写真印刷株式会社

製本 ✧ 島田製本株式会社

949

マッチ売りの少女
ポプラ社 1987
126p 22cm
こども世界名作童話 6

©木村由利子 若林三江子 1987 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はいつでもおとりかえいたします。

ISBN4-591-02606-X

マッチ売りの少女

アンデルセン・作

木村 由利子・文

若林 三江子・絵



❁ もくじ ❁

マツチ売^うりの少^{しょう}女^{じょ}

5

マメつぶの上^{うえ}にねた

おひめさま

23

ぶたかいの王^{おう}子^じ

31



みにくいあひるの子^こ

63

はい色^{いろ}のぼうや

64

友^{とも}だちをもとめて

87

あこがれの白^{しろ}い鳥^{とり}

104

解説

122





マツチ^う売りの少女^{しょうじょ}



なんて、さむいのでしょうか。雪ゆきがふっているうえ、そろそろくらくなってきました。

きようは、おおみそか。一年ねんのさいごの日ひです。

この、さむくてくらい町まちのなかを、みすばらしい女おんなの子こがあるいていました。女おんなの子こは、あたまになにもかぶらず、そればかりか、はだしでした。

家いえをでるときは、つつかけをはいていたのです。けれども、さむさをしのぐやくにはたちませんでした。つつかけは、女おんなの子こには大きおおすぎました。なにしろ、なくなったおかあさんが、まだこの世よにいたころはいていたつつかけだったのです。だから、ぶかぶかなのもあたりまえですね。

そこへ、馬車ばしやが二台だい、おそろしいはやきで、つつこんできたのです。

女おんなの子こは、あわててみちをわたろうとしました。そのひょうしに、つつかけがぬげてしまったのでした。

かたほうは、どうしてもみつかりませんでした。もうかたほうは、男おとこの子こがとって、にげました。

「わーい、ぼくにあかちゃんができたら、こいつをゆりかごにしてやるよ。」

なんて、はやしたてていましたっけ。

そういうわけで、女おんなの子こは、はだしであるいていたのでした。



さむさのせいで、青^{あお}白^{しろ}い足^{あし}に、赤^{あか}いはん点^{てん}がうかびだして
いました。

女^{おんな}の子^このふるばけたエプロンには、売^うりもののマツチが
どっさりつめこんでありました。手^てにも、ひとたばもってい
ます。

朝^{あさ}から一^{いち}日^{にち}じゅうあるきまわったのに、マツチはまだ一本^{ぽん}
も売^うれていませんでした。お金^{かね}をめぐんでくれる人^{ひと}も、ひと
りもありません。

おなかはぺこぺこ。さむくてつめたくて、こごえそうです。
女^{おんな}の子^こはかわいそうなぐらい、しょんぼりしたようすをして
いました。

かたでくるりとまいた、金色きんいろのきれいな長いながかみに、雪ゆきが
ふりつもらいます。でも、女おんなの子には、はらいのける元氣げんきもの
こつていないようでした。

どの家いえのまども、あかあかともしびがまたたき、がちよ
うをやくいいにおいが、ぷうんとただよってきます。

「そうか。きょうは、おおみそかなんだ。だから、ごちそう
をつくつてゐるのね。」

家いえが二けんならんでたっていました。そのうち一けんが、
少しすこどころにはりだしているおかげで、あいだに、風かぜをよけ
られるばしょができていました。

女おんなの子はこそのすみに、風かぜをよけて、うずくまりました。小ちい

さい足は、おしりの下にちぢこめました。それでも、からだはひえこむばかりです。

けれども、こわくて家にはかえれません。

マツチは一本も売れませんでした。もうけたお金が一円もないのです。このままかえたら、おとうさんになぐられます。

それに、家にかえっても、さむさにかわりはありません。あたまの上に、ようよう、やねがのっかっているだけの、みすばらしい家です。かべのあなやすきまに、どんなに、わらやぼろきれをつめこんでも、風がびゅんびゅんふきこんできます。

小さい手^ては、さむさにかじかみ、ほとんどかんじがなくなっていました。こんなときなら、マッチ一本^{ほん}だって、少しはやくにたつかもしれません。

一本^{ほん}だけ、ほんの一本^{ほん}だけ、売りもの^うのマッチをすってみたらどうかしら……。

女^{おんな}の子^こは、一本^{ほん}、かべですつてみました。

しゅわっ。

わあっ、明^{あか}るい。それに、よくもえること。

手^てでかこうと、小さいラン^ちプのように、あたたかく、きれいな光^{ひかり}になりました。

それにしても、ふしぎな光ひかりです。まるで、ぴかぴかのかざりがついた、てつのストーブにあたっているような気がしました。

火ひはやさしくもえ、からだをしんからぬくめてくれます。

でも、あーあ、なんてこと。ちぢこめていた足あしをあたためようとのばしたら、とたんに火ひは、すうっときえてしまいましたが。ストーブも、きえうせました。

女おんなの子この手てには、マッチのもえがらがのこっているばかりでした。

もう一本ぽん、もう一本ぽんだけ。女おんなの子こは、またマッチをすつてみました。

ほのおがもえあがり、かがやきます。光^{ひかり}があたると、あれつ、かべがベールみたいにすきとおりました。

家^{いえ}のなかがみえます。テーブルには、かがやくようにまっ白^{しろ}なテーブルクロスがかかっている、じょうとうのしよつきがならんでいます。リングとプラムのつめものをした、がちょうのまるやきまであります。

もつとふしぎなことがおこりました。がちょうがおさらからぴよいととびだして、せなかにナイフとフォークをつきたてたまま、よたよたやってくるじゃありませんか。

そう、マツチ^う売りの女^{おんな}の子^こに、まっしぐらにむかつてきます。

